現代文学論（二）

― 現代の文筆家は、時代状況というテクストをどう読み解くべきか ―

小林　英信

［Ⅰ］

古典文献学のみならず、小説、評論、ラジオ・ドラマ、翻訳と多方面にわたって活躍している Walter Jens は、1962年の11月に『文筆家と政治』と題した講演を Die Berliner Kongreßhalle で行なっている。その講演は、後に Bonn、Erlangen、Freiburg、Marburg、Tübingen といった諸大学において繰り返されたが、1961年に行なわれたもう一つの講演とあわせ、翌年の1963年に一冊の本にまとめられている。[1)]

その本の短い『序』の中で、W. Jens は、次のように述べている。

「私から見ますと、今日文学批評家 Kunstrichter に対して与えられている重要な仕事はと言いますと、《高度に発達した産業社会において、作家はどのような状況下に置かれているか》ということを明らかにすることと、《そのような状況下に置かれている作家は、現実社会に対してどのようなことを要求すべきであるか》ということを分析することの二つである、と言うことができます。」[2)]

もちろん、W. Jens がこの講演の中で、この二つの問題に対して彼なりの答を与えようとしていることは、もはや言うまでもないであろう。

以下、この小論においては、W. Jens のそれらの問題に対する答を明らかにするとともに、その明らかになった答に対し批判的検討を加えることにする。

［Ⅱ］

まず、第一の《「高度に発達した産業社会において、作家はどのような状況下に置かれているか」》といった問題についてであるが、W. Jens は、今日のドイツの文筆家が置かれている社会的状況について、次のように語っている。

「皆さん、今日のドイツの文筆家は、三重の意味で孤独な人間であると言うことができます。と言いますのは、かれらは、①どの階級からも、その階級が抱えている問題に答えを与えてくれるよう依頼されることがなく、また②どの祖国から

も、その祖国の国民として保護されることがなく、さらに③どの勢力 Machtとも同盟関係を結ぶことがないからです。」[3)]

まず、①の《「どの階級からも、その階級が抱えている問題に答えを与えてくれるよう依頼されることがない」》といったことから見て行くと、W. Jens は、第二次大戦中のドイツとフランスにおけるインテリ階級と労働者階級の関係を比較して、次のように語っている。

「この違いは明らかです。すなわち、カミュやサルトルらは、フランスのレジスタンス神話に感化されて、プロレタリア階級のものの見方 Einsicht にあらゆる希望を託しましたが、ドイツでは、状況がまったく異なっていたために、インテリ階級と労働者階級とが出会うということは、一度もありませんでした。」[4)]

もう少し詳しく述べると、W. Jens は、次のような意味のことを語っている。

すなわち、ドイツの文筆家、とりわけ「ヒトラーが政権を取った頃まだ少年であった自分たち1920年代生まれの文筆家」は、ナチスの時代に起こったことから、《「ブルジョアもプロレタリアも一様に誘惑 Verführung には弱い」。すなわちヒトラーの率いるファシズム勢力に簡単に籠絡されてしまっている》ということを知った。すなわち《少なくともドイツにおいては、その点に関しては「どの階級も、他の階級よりより良いということはなく、またより悪いということもない」》ということを知ってしまったのである。一般化して言うと、《どの階級も、時代状況が厳しくなれば、抵抗力を失ってしまう》ということを知ってしまったのである。

また、「自分たち1920年代生まれのドイツの文筆家」は、《「フランスにおけるパルチザン、すなわちマキ Maquis がどのようなものであり、対独協力者 Quisling がどのようなものであるか」》ということも知っている。すなわち、労働者に限って言えば、《労働者は、マキの中にもいれば、対独協力者の中にもいる》ということも知っているのである。

さらに、ドイツの事実に関して言うと、「自分たち1920年代生まれのドイツの文筆家」は、《1944年 7月20日に決行されたが、不運にも未遂に終わってしまったヒトラー暗殺計画には、「労働組合員も加わっていれば、貴族階級出身の軍人も加わっている」》ということをも知っているのである。

このような事実を知ってしまったために、「自分たち1920年代生まれのドイツの文筆家」は、《「どの階級であれ、その階級の中には、正義ないし大義のために命を投げ出すことのできる人 Märtyrer もいれば、逆にその時代の支配者に唯々諾々と従ってしまう人 Knecht もいる」》といった認識を持つようになってしまった。

そして、図らずもこのような認識を持ってしまったために、言いかえれば、すべて

の階級に対して抜き差しならない不信感を抱いてしまったために、ドイツの文筆家、とりわけ「自分たち1920年代生まれのドイツの文筆家」（＝インテリ階級）は、第二次大戦中にカミュやサルトルといったフランスの文筆家が労働者階級と手を結んだようには、戦後のドイツにおいて、自分自身の階級を含む特定の階級と、もちろん労働者階級とも手を結ぶことができないでいる。おそらくその結果としてであろう、《どの階級からも、その階級が抱えている問題に答えを与えてくれるよう依頼されることがない》、と。[5)]

以上のような意味のことを W.Jens は講演の中で語っているが、このような彼の考え方を押し進めて行くと、《ある階級が他の階級と手を結ぶことができるようになるのは、相手の階級に属するすべての者が、その階級に固有の立場に立ち、一致団結して行動してるという確信が持てたときのみ》ということになるであろう。

したがって、W. Jens のこのような考え方からすると、カミュやサルトルらがマキに加わることができたのは、すなわち当時の労働者階級とも手を結ぶことができたのは、《当時のフランスの労働者階級に属するすべての者が、マキに直接参加するか否かは別として、一致団結してマキを支持していると確信することができたから》ということになるであろう。視点を変えて言えば、カミュやサルトルらは、《少なくない数の労働者が、対独協力者となっているという事実を知らなかったから》ということにもなるであろう。

もはや言うまでもないことであるが、このような W.Jens の考え方は、決して正しいとは言えないであろう。なぜならば、共に哲学を研究し博学多識を誇るカミュやサルトルらが、そのような事実を知らないでいたということは、およそ考えることができないからである。

ちなみに、サルトルは、大戦直後の1948年に書かれた『文学とは何か』という本の第４章「1947年における作家の状況」において、次のように述べている。

「プロレタリアートは、あやまつこともあり、しばしば瞞着されることもある人間たち、正しいと同時に、不正でもある人間たちからなっている。」[6)]

この言葉は、正確に言うと、「スターリン的共産主義」を念頭において述べられたものであるが、このようにプロレタリアートに対して幻想を抱かず、リアルな認識を持っていたサルトルが、《労働者の中にも対独協力者が少なからずいた》という事実を知らなかったはずはない。

サルトルはまた、上の言葉の少し前のところで、次のように述べている。

「われわれは、1870年のブルジョアジーがそうであったように、今日作家にとって革命的大衆を構成しうるかもしれない労働者階級の方に、身を向けている。そ

れは、まだ潜在的な大衆ではあるが、目立って現在的な大衆である。1947年の労働者は、社会的で専門職業的な教養を持ち、技術的で組合主義的で政治的な定期刊行物を読み、自己自身と、世界での自己の位置とをすでに意識し、われわれに教えるべき多くのものを持ち、モスコーで、ブダペストで、ミュンヘンで、マドリッドで、スターリングラードで、マキ隊において、われわれの時代のあらゆる冒険を生きた。書くという芸術のなかで否定性と創造的乗り超えとの二つの姿のもとにわれわれが自由を発見しつつある時に、彼は自己を解放し、その上すべての人間を抑圧から永久に解放しようとしている。（中略）われわれは抗争し建設する義務を彼と共通に持っている。われわれがわれわれの歴史性を発見しつつある時に、彼は歴史を作る権利を要求している。」[7)]

この言葉から推測できるように、カミュは別として、少なくともサルトルがマキに参加し、労働者階級と手を結ぼうとしたのは、《そのような組織ないし階級が持つ歴史的・政治的あるいは文学的・人間的役割に共感したからである》と言うことができるであろう。決して《すべての労働者が、一致団結してマキを支持しているから》といった理由からでないことは、明白である。そもそも一つの階級に属するすべての人間が、こぞって一つの組織もしくは運動体に参加するか、あるいは支持するといったことは、個人の自由ないし主体性をもっとも重要視する実存主義者サルトルからすれば、およそ考えられないことであるからである。

［Ⅲ］

ところで、W. Jens は、上に見たように、今日の、すなわち1962年当時のドイツの文筆家は、《どの階級からも、その階級が抱えている問題に答えを与えてくれるよう依頼されることがない》、すなわち文筆家の方から見れば、第二次大戦中のフランスの文筆家のように、《他の階級、とりわけ労働者階級と手を結ぶことができないでいる》と語っているが、W. Jens はさらに論を進め、《そもそも労働者階級と手を結ぼうにも、当の労働者階級が存在していない》と語っている。

もう少し正確に言うと、《19世紀の末期に活躍した自然主義作家フォンターネがその作品においてリアルに描いているような労働者は、今日すでにドイツにおいては見られなくなっている》、すなわち《「今日のドイツには、典型的なブルジョアがいないのと同様、典型的な労働者もいません」[8)]》と語るのである。W. Jens は、《「階級そのものが消滅してしまっている klassenlos」[9)]》とまで語っている。

W. Jens は、そのように判定する根拠として、 次のような事実を挙げている。

「今日、一般の市民 Bürger と貴族（今日なお存在していると仮定してのことで

すが）との間には、どのような違いがあるでしょうか。ブルジョアは、本当にプロレタリアと違った話し方をしているでしょうか。いたる所で区別は、曖昧になってきているのではないでしょうか。荷役労働者は、本当に事務職員と違った考え方をし、書き方をしているでしょうか。（中略）工場の門を出て行く労働者と講義室を後にする学生とは、もはや区別することができません。なぜならば、両者はともに、同じ言葉をしゃべり、同じ髪の形をし、同じ目標を持っているからです。」[10)]

この言葉から明らかなように、W. Jens によって《階級消滅論》を正当化する根拠として挙げられている事実、すなわち《話し方とか考え方、あるいはファッションとか生活上の目標といったものが同じである》といった事実はすべて、意識もしくは外面的なものに関する事実ばかりである。経済学的に見れば、上部構造における諸事実であると言うことができるであろう。

果たして、《階級消滅論》を正当化するのに、意識もしくは外面的なもの、すなわち上部構造における事実だけで十分であろうか。

もちろん、十分でないことは、言うまでもないであろう。

ちなみに、石井伸男は、階級意識に関する「二つのタイプの偏向」について、次のように述べている。（ここでは、本論に関係のある最初のタイプの偏向についてのみ見ておくことにする。）

「ここで階級意識を把握する上でぶつかる二つのタイプの偏向についてふれておこう。それらは我々の理解を誤った道にさそいこむ危険をもつからである。

その一つのタイプは階級意識を、表面にあらわれた労働者の意識現象に解消するものである。現象主義ないし実証主義とよぶべき接近態度である。その代表的なものは＜国民の九割が自分の生活を中流だと意識している＞という意識調査の結果をもとに＜巨大な新中間層の成立＞を説き、そこからまた労働者階級意識の＜減退＞や＜消滅＞さえも引き出してくる、というやり方である。」[11)]

「以上から考えるべきことは、意識の日常的現れを重視しつつも、意識の規定をそれだけに限定すべきではないことである。階級意識についてはとくにそれがいえる。それは社会全体のなかでの自己の階級の把握にかかわるものであり、平常時と変動時では大きく変わるからである。したがって我々は階級意識を問題とするにあたって、労働者意識のときどきの実態から出発しつつも、資本に対する労働者の基本的位置関係からでてくる、意識の発展傾向をもとらえなくてはならない。」[12)]

「大衆が<大衆操作>の対象であるという基本的問題点は忘れるわけにはいかないのである。大衆化された社会は階級社会であることをやめたわけではない。まったく逆にそれは資本制社会の現象形態である。したがって大衆の多くは労働者階級にほかならない（のである）。」[13)]

少し引用が長すぎたが、石井伸男のこれらの言葉から明らかなように、《ある社会が階級社会であるか否か》を判定するには、やはり経済学的な分析、すなわち下部構造における諸事実の分析が必要であり、したがって、上に見たような W.Jens の意識ないし外面的なものの分析だけでは、決して十分であるとは言えないのである。

W. Jens も自分の判定に自信が持てなかったのだろうか、講演の中で、次のような言葉を洩らしている。

「今日のドイツには、典型的なブルジョアがいないのと同様、典型的な労働者もいません。また、サルトルとかデリーが言葉の本来の意味に基づいて正しく使っています<ブルジョア的 bürgerlich >という言葉は、わが国においては、もはや社会学的用語にしか過ぎないと言うことができるでしょう。それとも、それはブルジョアジーがますます強く生き延びるためのカムフラージュにしか過ぎないのでしょうか。」[14)]

「今日のドイツの社会は、一見しただけでは、とても階級社会であるようには見えませんが、しかしそのように見えることは、新しい資本主義がこらした巧妙なカムフラージュの結果なのでしょうか。」[15)]

いずれにしても、経済学的な分析結果も加味して考えれば、1962年当時のドイツの社会が「大衆化された社会」であり、「資本制社会」であり、「階級社会」であることは、もはや多くを述べるまでもないであろう。

[IV]

次に、②の《「どの祖国からも、その祖国の国民として保護されることがない」》といったことについてであるが、このことについては、W. Jens は、①について語ったほど多くは語っていない。

それでも、W. Jens は、次のような注目すべき言葉を語っている。（カッコ内は筆者が補足したもの）

「1914年以降、国家ないし祖国について明らかになっていることを順を追って述

べてみましょう。

（第一次大戦中におきましては）人は、国家ないし祖国につきまして、共和制もしくはゲーテの名において語ることができました。すなわち、人は、より良いドイツ（ゲーテのドイツ）とより悪いドイツ（共和制のドイツ）とを比較し選択することができました。また（第一次大戦後におきましては）、人は、より悪いドイツと最悪のドイツ（ヒトラーのドイツ）とを比較し選択することができました。そして（ヒトラーが政権を取りますと）、ヒトラーの祖国と亡命者の祖国とが生まれました。さらに（第二次大戦が終わりますと）、ニーチェが嫌いました祖国（民主主義国家・西ドイツ）とカール・マルクスの名前が書き込まれました祖国（共産主義国家・東ドイツ）とが生まれました。

（このような1914年以降の国家ないし祖国についての歴史を見ますと）、今日ドイツの文筆家が、すなわち（ナチス時代に）濫用されることの多かった、大げさで内容のない美辞麗句に嫌悪感を持っているドイツの文筆家が、＜ドイツの＞とか＜祖国＞といった言葉をカッコ付きでしか使わなくなったとしましても、そのこと自体を、一体誰が非難できるでしょうか。また、そのようなドイツの文筆家が、ドイツという国家ないし祖国を弁護する人になって下さいという国民からの要求をきっぱりと断ったり、あるいは、たとえそれが19世紀末のブルジョア階級であれ、またマルクス主義を信奉する進歩的なプロレタリア階級であれ、特定の階級の意識と自分たちの世界観とが同一であるという印象を極力与えないように努力してきたとしましても、やはりそのようなこと自体を、一体誰が非難できるでしょうか。」[16)]

この言葉から、おそらく容易に、次のようなドイツの文筆家のイメージ、とりわけ「1920年代に生まれたドイツの文筆家」のイメージが浮かんでくるであろう。

すなわち、「テロが荒れ狂った時代に育ち、あらゆる下劣な行為を間近に見続けてきた」[17)] 彼らは、そのような少年時代の厳しい体験からすれば止むを得ないことであるが、平和が回復し、あらゆる価値を自由に、かつ客観的に検証できるようになったにもかかわらず、また、その結果として、どのような価値であれ、自分がよしとする価値は自由に選ぶことができるようになったにもかかわらず、国家ないし祖国という権威によって権威づけられた価値だけは絶対的に拒否したり、あるいは疑いの眼で見ようとしている、といったイメージが。

ところで、そのようなイメージが決して虚像ではなく、彼らの実像、すなわち実際の姿であったとすると、彼らは、国家ないし祖国に関しては、徹底した懐疑主義者であったと言うことができるであろう。

また、そうであったとすると、②の《どの祖国からも、その祖国の国民として保護されることがない》といった言葉も、字義通り《彼らは保護を希望していたが、しか

し国家ないし祖国によって拒否されていた》といった消極的な意味に解釈するのではなく、《彼らの方から、絶対的に国家ないし祖国の保護を拒否していた》といった積極的な意味に解釈すべきであろう。

もちろん、彼らがそのような、良く言えば<主体的な>、しかし悪く言えば<主観的な>態度を保留し、その上で、国家ないし祖国に関する諸事実を冷静にかつ客観的に分析するならば、すべての国家ないし祖国を絶対的に拒否するといった態度は決して生じてこなかったであろう。

なぜならば、上に引用した彼の言葉を見れば明らかなように、少なくともゲーテの名を冠した国家ないし祖国は「より良いドイツ」である、と肯定的に評価しているからである。

[V]

最後に、③の《どの勢力 Machtとも、同盟関係を結ぶことがない》といったことについてであるが、このことについては、W. Jens は、余り多くを語っていない。ただ関連すると思われる発言としては、次のような発言があるだけである。この発言をもとに、③の言葉が意味するところを探ってみることにする。

> 「Aporetiker である今日のドイツの文筆家だけが、様々な現象が持っている価値を自らに固有の物差しで、すなわち他の誰も持っていない自分だけの物差しで計ることができるかも知れません。スターリン主義者に対しましては社会主義者として、また聖職者に対しましてはキリスト教徒として、さらに狂信者に対しましては民主主義者として、（前者のものたちが、それぞれ自らの過ちないし矛盾に早く気付いてくれることを願いつつ）鏡を彼らの前に突きつけることができるかも知れません。」[18)]

まず、この発言についてであるが、W. Jens は、この発言の中で、今日のドイツの文筆家のことを Aporetiker と呼んでいる。 一体、Aporetiker とは、どのような人間のことを言うのであるのだろうか。

言うまでもないことだが、Aporetiker とは、Aporie（ギリシア語で aporia）に直面している人間のことである。すなわち、 Aporie が「ある（一つの）問題について二つの同様に成り立つ対立した見解に当面すること」[19)] ということであるから、そのような見解に当面している人間ということになるだろう。

ところで、W. Jens が言うように、今日のドイツの文筆家が Aporetiker であるとすると、おそらく次には、《では、どうして今日のドイツの文筆家は、そのような人間になってしまったのだろうか》ということが問題になるであろう。

今日のドイツの文筆家は、一体どうして、そのような人間になってしまったのだろうか。

その答えを、W. Jens は直接語っていないが、しかし既に述べた、彼らは《階級》とか《国家ないし祖国》に対して懐疑的ないし批判的な距離を置いているとか、あるいは今上に引用した発言の後半部分、すなわち彼らは、相手によっては、あるいは問題の種類によっては、自由に立場を変えることができるといったことなどから判断すると、その答えは、《彼らは、一つの問題ないし対象を複数の視点から見てしまうといった習慣を持っているから》ということになるであろう。

このような習慣を持っていることと、 Aporetiker になってしまうことの間にある論理的関係を整理すると、次のように整理できるであろう。

◎［ドイツの文筆家は、一つの問題を特定の一つの視点から眺めない］

↓

◎［ドイツの文筆家は、一つの問題を二つ以上の視点から眺める］

（ちなみに、その二つ以上の視点は、どの視点も対等に尊重される）

↓

◎［ドイツの文筆家は、一つの問題について二つ以上の見解を同時に持つ］

（ちなみに、その二つ以上の見解は、どの見解も同時に成立し得る）

↓

◎［ドイツの文筆家は、一つの問題について一つの解答を見い出し得ない］

↓

◎［ドイツの文筆家は、Aporetiker となる］

上に引用した発言を、以上のように理解した上で、もう一度③の言葉を見直してみると、その言葉の中にある《「勢力」》といった言葉が、「社会主義者」とか「民主主義者」、あるいは「キリスト教徒」といった、いわば＜政治的ないし宗教的勢力＞のことを言っているということは、もはや疑いようがないであろう。

したがって、③の言葉は、《どの政治的ないし宗教的勢力とも、同盟関係を結ぶことはない》といった意味になるであろう。《階級》とか《国家ないし祖国》に対して批判的距離を置くドイツの文筆家、とりわけ「1920年代生まれのドイツの文筆家」がこのような現実社会を支えている中心的勢力に対しても批判的距離を置き、それらと同盟関係を結ばなかったとしても、何ら不思議ではないであろう。

［VI］

最後に、第二の《そのような状況下に置かれている作家は、現実社会に対してどの

ようなことを要求すべきであるか》といった問題について考えてみよう。

これまで見てきたことから明らかなように、ドイツの文筆家、とりわけ「1920年代に生まれたドイツの文筆家」は、少年時代に余りにも多くの「愚劣な行為を間近に見続けてきた」ために、《階級》とか《国家ないし祖国》、あるいは《政治的ないし宗教的勢力》に対して深い不信の念を抱いてしまった、すなわち徹底した懐疑主義者になってしまったと言うことができるであろう。

そのことの大きな代償が、すでに述べた「三重の意味での孤独」ということであったのだが、その「三重の意味での孤独」は、必ずしも彼らにマイナスに作用したばかりではなかった。なぜならば、彼らは、その「三重の意味での孤独」に耐えることによって大きな自由を勝ち得ることができたからである。

W. Jens は、語っている。

「まさに、この三つのどの極 Pol（階級・祖国・勢力）からも等距離を保っているということは、すなわち等しく手を結ばないでいるということは、これまでなかったような大きな自由をドイツの文筆家にもたらしています。これは、千載一遇の、願ってもないチャンスです。」[20)]

ところで、W. Jens は、このようにして勝ち得ることができた大きな自由を生かして、どのようなことをすべきであると考えていたであろうか。

結論から言うと、W. Jens は、《国の内外を問わず、現実社会に起こっている様々な不正義、とりわけ政治的・社会的不正義に対して自らの意見を率直に述べるということをすべきである》と考えていた、と言うことができるだろう。

もはや言うまでもないことだが、そのような《政治的・社会的不正義に対して自らの意見を率直に述べる》ということが可能になるためには、現実社会における諸々の組織ないし集団からの自由が必要であろう。幸い、これまで見てきたように、ドイツの文筆家は、《階級》とか《国家ないし祖国》、さらに《政治的ないし宗教的勢力》から自由であった。したがって、そのための条件はすでに十分に整っていると言うことができるであろう。すなわち、そのような条件を大いに生かして、ドイツの文筆家は、《政治的・社会的不正義に対して自らの信ずるところ・考えるところを忌憚なく述べるべきである》と、W. Jens は言うのである。

ちなみに、W. Jens は、文筆家が政治的・社会的不正義に対して発言するということの重要性について、次のように語っている。

「文筆家は、ホメロスのように権力とか君主を誉め讃えるということは、すでに

行なわなくなっておりますが、しかしヘシオドス以来受け継いできました第二の機能、すなわち警告するという機能は、今日文筆家にとってますます重要になっております。今日のように、盲目的な従順さが支配的である時にこそ、警告者の否という声、エラスムス的な怒り、熟慮、ソクラテス的な慎重さなどが重要であるのです。」[21)]

また、W. Jens は、カミュの言葉を引用しつつ、《芸術家（文筆家）は、すでに今日、政治的・社会的出来事という「ガレー船」に乗せられてしまっている》という事実について、次のように語っている。

「カミュは、1957年12月14日にスウェーデンの Uppsalaにおいて、次のように語っております。＜このような騒動（＝ハンガリー動乱）が起きているというのに、文筆家は、あれこれ考えたり、創作に没頭すると称して、そのような出来事に対して無関心であろうとしていますが、そのようなことは、もはや許されません。もちろん、考えたり、創作に没頭することは、文筆家にとっては非常に重要なことではありますが。これまでは、どの時代におきましても文筆家が現実に起こっている出来事に対して無関心であるということは、大なり小なり可能でありました。現実に起こっている出来事を容認できないものは、沈黙するか、あるいは話題を変えるということもしばしば可能でありました。しかし今日、様相は一変しております。すなわち沈黙そのものが、すでに危険な意味を持つようになっているのです。今日投票を棄権するということも、すでに一つの決定と見なされ、そのようなものとして誉められたりけなされたりしておりますが、このような時代を迎えている今日、芸術家は、個人の意志とは関係なく、すでにガレー船に乗せられてしまっているのです。＞」[22)]

さらに、今日はあらゆる種類の否定的な言葉が投げつけらるナチスの暴力的支配に対して、多くの文筆家が沈黙させられてしまうか、あるいは屈伏させられてしまうといった苦い経験を持つドイツにおいて、たとえ戦後自由に発言できるようになったとはいえ、少なくない数の文筆家が政治的・社会的不正義に対して積極的に発言していることを評価しつつ、W. Jens は、次のように文筆家の使命について語っている。

「放棄 Verzicht とか反乱 Rebellion、あるいは抵抗 Widerstand について情熱的に語ることが、今日の文筆家の特徴であります。とりわけ、ここ10年間のドイツの文筆家の特徴であると言うことができるでしょう。テロが荒れ狂った時代に育ち、あらゆる下劣な行為を間近に見続けてきました1920年代生まれのドイツの文筆家は、否定もしくは否認に対しまして再び高い価値を与え、不正義者が仕掛

けてきます挑発、あるいは法の歪曲、暴力的行為（それが地球上のどこで起こりましても）などに対しまして先頭に立って闘うことが、自らの使命であると考えております。」[23)]

なお最後に、W. Jens は講演の中では直接語っていないが、そのような政治的・社会的不正義に対する文筆家の率直な発言が、十分な根拠を持ち、説得力を持ち得るためには、《文筆家自身が現実の諸状況をリアルに認識しておく》といったことが必要であるということは、もはや言うまでもないであろう。

また、その《文筆家自身が現実の諸状況をリアルに認識しておく》といったことであるが、そのことのためには、文筆家がこれまでの権威づけられた視点から、すなわち既成の有力なイデオロギーや主義主張に寄りかかって現実の諸状況を見てはならないと言うことができるであろう。言いかえれば、既成の有力なイデオロギーや主義主張からまったく自由な眼で現実の諸状況を見なければならない、と言うこともできるであろう。

と言うのは、これもまた、もはや言うまでもないと思うが、既成の有力なイデオロギーや主義主張は、今日激しく変化し続ける現実を統一的に捉え、そのような現実にあって《人間は、一体何をなすべきであるか》、すなわち《人間のなすべきこと》をはっきりと提示することができなくなってしまっているからである。

したがって、もし文筆家が《政治的・社会的不正義に対して説得力のある発言をしようとする》ならば、もっとも根本的な作業として、《今日激しく変化し続ける現実を統一的に捉えることができるような視点を獲得する》といった作業を行なわなければならない、ということになるであろう。

W. Jens は、別なところにおいてだが、今日の文学、すなわち文筆家が、そのような視点を獲得することの重要性ないし必要性について、次のように述べている。

「近代の文学は、決してただ文学 Poesie であるばかりでなく、常に同時に科学であり哲学である。今日では、トマス哲学の流儀にならった緊密な哲学体系もないし、主導的な価値組織もないのであるから、そもそも理解されるためには、作者はひとたびまず、自分自身の在り方を定めねばならない。ブロッホが的確に表現している如く、作者はもはや、<気儘にさっさと詩作すること>はできないのである。作者は自分自身の在り方をできる限りはっきりと決定しなければならぬのであり、そのためには、一見<素朴な>詩人にさえ、自分がよりどころとする一つの考え方が必要なのである。（中略）文学 Poesie でさえ、認識につかえるのだ」[24)]

以上、もはや言うまでもないと思うが、W. Jens は、第二の問題に対する答えとし

て、基本的には《政治的・社会的な不正義に対して率直に発言すべきである》ということ、そしてその発言を説得力あるものとするためにも、《今日激しく変化し続ける現実を統一的に捉え、その現実において人間がなすべきことをはっきりと提示できるような視点を獲得すべきである》と考えていた、と言うことができるであろう。

おそらく、そのような視点を獲得することができ、そのような視点から現実の諸状況を客観的に分析していったとき、＜今日の社会が紛れもなく階級社会であり＞、また＜過去によい国家ないし祖国を求めるのでなく、未来にそれらを創造してゆくべきであり＞、さらに＜そのためにも、現実の政治的ないし宗教的勢力とも、もちろん十分な批判的距離をおきながら、手を結んでゆくべきである＞ということが明らかになってくるであろう。まさにデカルトが、方法的に懐疑し否定していったものを、自己の存在の確実性を発見した後は、それらの存在を承認し肯定していったように。

引用文献

1) Walter Jens, *Literatur und Politik*, Neske, 1963.
2) Ebenda, S.3.
3) Ebenda, S.15.
4) Ebenda, S.8.
5) Ebenda, S.8~9.
6) ジャン＝ポール・サルトル、『シチュアシオンⅡ』（サルトル全集第九巻）、人文書院、1964年、213頁。（白井健三郎訳。ただし、後半の「正しいと同時に、不正でもある人間」の部分は、白井訳では、「正しいまた不正の人間」となっている。その部分のみ筆者が手を加えた。）
7) 同上書、212頁。
8) W. Jens, ebenda, S.7.
9) Ebenda, S.14.
10) Ebenda, S.6.
11) 石井伸男、『社会意識の構造』、青木書店、1986年、179頁。
12) 同上書、180頁。
13) 同上書、196頁。
14) W. Jens, ebenda, S.7~8.
15) Ebenda, S.10.
16) Ebenda, S.13.
17) Ebenda, S.17.
18) Ebenda, S.16.
19) 『広辞苑』、岩波書店、「アポリア」の項参照。
20) W. Jens, ebenda, S.15.

21) Ebenda, S.16.
22) Ebebda, S.17.
23) Ebenda, S.17.
24) W. イェンス、『現代文学』、紀伊国屋書店、1961年、10頁。（高本研一訳）